

---

# ファインダーの向こう側

蒼桐隼人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファインダーの向こう側

### 【Nコード】

N8869B

### 【作者名】

蒼桐隼人

### 【あらすじ】

あらゆるものが美しく見える目をもつ、写真家の公博。そんな彼の写真を何故か拒絶しつつ、恋する妹の花穂。ある日公博は友人の平井から、書道家の蘭を紹介され心惹かれるのだが――。

## 1枚目 二人の世界

ゆつくりと深く頭をたれて、揺れる枝垂れ桜。太陽に恋をした、盲目の向日葵。花開いたまま、その身を地に落とす椿。化粧好きの、おしゃれな紅葉。

春夏秋冬、それぞれのそこにある自然。それ以上でもそれ以下でもない。

これらは全て、ある一人の男が撮った写真だ。

世界を切り取ることは、その男にとって呼吸をするのと同じくらい当たり前なことらしい。いや、だからこそ男には人ならぬ世界が見えるのだろう。

男はそれを仕事にしていた。誰もが、その男と映しだされた景色を賞賛してくれる。

そう、たった一人を除いて。

三月下旬の春の夜風はまだ冷たく、黄色の月も雲の隙間に隠れてぼんやりとしている。空気が眠っているから、こんな日はきつとうさぎも餅をつかずに、夜桜を肴に宴会でもしているのだろう。

こういうのもいいなあ、と大げさなくらい空を仰いで月を見ていた公博きみひろはそんなことを考えていた。そんな家までの帰り道。自分の写真のモチーフは花など自然を撮ることが多いが、誰にそれを押し付けられたわけでもない。両手の親指と人差し指で「人」字を作ると、即席のファインダーから朧月をとらえ、うん、一言呟いた。

それを最後に、かけ足で我が家の茶色の屋根を目印に走り出す。

アスファルトの大地には自然の姿はどこにもないけれど、鼻歌でも歌いたい気分で公博は地面を蹴った。

それから五分ほど過ぎた後。まだ若い公博の持ち家にしては大きすぎる自宅のドアを開けた。

「……お仕事、終わったの？」

久しぶりの展覧会の初日を終えて帰宅した公博を、ちょうどリビングに降りてきた花穂が出迎えた。

お気に入りらしい、袖が少し長い緑のチェックのパジャマは深い草原のようで、それを着ている花穂は文字通り一輪の花のようだ。小さくてもそこにいるだけでよく映える。

仕事のある日はいつも帰宅時間の遅い公博が、今日に限って早いことに花穂は目を丸くしながら言った。おかえりなさい、と。

水晶体の奥に兄の姿を捕らえたから、全てのものの輪郭が急にはつきりしてきたらしい。頬を赤く染め、落ちつきのない様子で自分の格好を確認し、朝からパジャマのままだったのを恥ずかしがるように、襟元をきゅっとつかんで上目づかいに公博を見上げた。はずみで両耳にかけたサイドの髪がさらりと零れる。まるで花が風にそよぐよう。

「ただいま。今日は何が食べたい？」

苦笑を噛み殺して、ストレートなはずの髪を撫でつけてやる。四方八方にはねた黒髪が、寝相の悪さを無言で語っていたからだ。

公博は早く帰宅できた日には必ず、自分が料理を作ると決めていた。二人で相談して決めたルールではないが、それくらいのことをしてやるのが自分の役目だと思っていた。うまくできた例はひとつもないし、自己満足にすぎないのだが。

花穂は嫌がるそぶりは少しも見せず、静かにまぶたを閉じていた。  
「……なんでもいい。兄さんがいてくれれば」

まぶたは開かれず、長いまつげが震えるだけ。凜とした声の奥にあるものは、一体何なのか。公博は花穂の言葉には明確には答えず、とりあえず着替えてこようか、と首を締め付けていたネクタイを緩めながら二人で一階を後にした。

公博にとって、妹が最愛なものには訳がある。

それは、家族と呼べる存在が花穂だけだからだ。二年前、両親が交通事故に遭ってから、それ以来ずっとだ。もつとも、それ以前からちよつと内気な可愛い妹であることに変わりはない。しかし両親の死は二人の絆を強めずにはいられなかった。花穂にとっても公博は唯一無二の存在であつたから。

「花穂、お皿取って」

着替えを済ませ、冷蔵庫に残っていた野菜やら肉やらを適当にぶちこんだシチューを前に、準備を頼んだ。うん、という返事に重なるように椅子が引かれる音と、食器棚のお皿がぶつかる音が公博の背中越しにも届いた。

いささか具がおそまつだが、こういう場合味は関係ないのだろう。公博はどこか楽しそうに鍋をかき回している。そこへ、ひよっこり花穂が顔を出す。兄さんお手製のなんでもシチューに目を輝かせつつも首を傾げ、おもむろに人差し指をつつこんだ。

「あ！　こら花穂！」

危ないじゃないか、とばやくが花穂はそ知らぬ表情でシチューの味を吟味している。

「兄さん、これ……ちゃんとルウ入れた？　薄くない？」

「ん、そうか？」

つられて公博も指を突っ込む。味はともかく、見た目よりも液体化していたシチューに顔をしかめる。

「買いに行くか？」

「ん、いいよ。今度がんばろう」

さりげなく花穂を外に連れ出そうと試みたが、やはり一蹴された。しかし自分でも買いに出るのは面倒だな、と思い直しやつちまったぞシチューを食すことにした。ご飯を花穂が盛り、シチューを公博が盛った。食卓の話題は終始、お互いの調子やらなにやらでくだった。ちなみに結局、公博がおかわりをしたので二人で三杯をたいらげた。残りは朝、昼の分になるのだらう。

片付けも終え、一息ついてお茶をすすっているとところで公博が言い出しにくそうに重い口を開いた。

家族の象徴でもある、湯のみ茶碗は二つ並んでいた。緑は公博で、薄い赤は花穂のもの。本当はあともう二つ色の違うものがあるはずだが、それはもう使われることはない。もう二度と。

「花穂、あ、あのさ」

「なあに？」

もう何度も繰り返した言葉だが、結果は違うのではと考えるたびに、喉が緊張してうわずった。テーブルの下で握っている封筒に手のひらの緊張が伝い、熱がこもった。他の誰かなら、こんなには緊張しないのに。でも他の誰かでは意味がないのだ。

「こ、これ今度の写真！ここに置いておくから。気にいったのがあったら言って」

そう言って、木目調のテーブルにパンパンに膨らんだ封筒を置いた。公博の言葉を受け止めるように、封筒の白はテーブルの木の色とよくなじんで見えた。

引き伸ばしてあるものは展覧会で飾られているものだけだから、中に入っているのは普通の写真と同サイズだ。簡単に手に取って見ることができる。しかし、言葉をかけられた少女はそれを拒否した。一瞬のためらいもなく。

「そんなの、ない」

まるでき捨てるような言葉。いや、それはどこか諦めているよ

うな口調でもあった。彼女の視線はそれを一瞥しただけ。ごちそうさま、と何かが鳴くような声で椅子から立ち、自室へ戻っていく。公博からは後姿しか分からなかったが、花穂の顔から笑顔は消えていた。ただ眉に皺をよせて、考え事をしているのか不機嫌なのか、誰にも読み取れない表情をしていた。

「そうか」

ただ、その一言だけ公博は絞りだすことができた。ゆがんだ顔は誰にも見られなくて、右手を額にあて頭を支えた。目前にちらつくのは、時間をかけて撮った四季折々の自然。公博はその衝撃に耐えられず、自分が愛する向こう側の世界を思った。

そこで、トントントン、階段を上る音がふいに止まった。

「おやすみなさい、兄さん」

「あ、ああ。おやすみ」

そこでようやく顔をあげた公博は気づいていなかったが、口もとは自然と上がっていた。段の途中で振り返り、兄の返事を聞いた花穂の口角も少しだけ上がっていた。

公博も自室に戻った頃。

誰もいない暗いリビングの食器洗い機の中では、色違いの湯のみ茶碗が二つ。音もなく寄り添っていた。濡れたままのそれらは、するりとひとしずく涙を流した。

## 1枚目 二人の世界（後書き）

初の連載、三人称、男性視点と初めてなことだらけです。更新はスローペースかと思っています。しかし作品の雰囲気はこれまでとあまり変わらないかなと思います。

お気に召しましたら、どうか最後までお付き合いください（＾－＾）



## 2枚目 月暈と雨

あらゆるものが美しく見える目をもつ男を兄とする少女は、胸にあるものを抱えていた。

それは果たして淡く儚き恋心か、漆黒に濡れる闇か。いずれにせよ、誰の知るべきところではなく――。

地上で生活する人々の大半が寝静まり、夜空の星さえも眠りにつく頃。

今宵も春月は茶色の屋根の一軒家を照らしていた。舞い上がる光の粒子は煌めきながら二階の出窓を貫き、柔らかな桃色のカーテンの隙間をすり抜け、少女の額を鮮明に映し出している。

そこは掌を置いたら、すっぽりと包まれてしまいそうなほど狭く、顔立ちからも綺麗なだけでなく何者にも染められていない幼さが見える。

寝苦しかったのか、一つ右に寝返りを打ったところで、花穂は目を覚ました。彼女の体内時計はいつもこうした時間に動き出す。最も、活動を始めるまではその日の体調に大きく左右されるのだけど。視界とは反対に、鮮明に彼女の鼓膜を穿つのは静寂の音。虫たちの息遣い。そして稀に、人の声。深夜という時間帯だからこそその囁きで、人によつては心地よい音空間だろう。

しかし花穂はそれらを気にする様子はなく　まだ意識が戻っていないからかもしれない、瞳が焦点を合わせると同じ速度で、ベツトから這い出した。

枕元の乱雑に置かれた本やら何やらを掻き分け、所在なさげにあ

くびを二回。長時間の睡眠による筋肉の緊張をほぐすため、肩を大きく回した。それだけの動作に十分以上時間を要したことから、彼女にはそれだけでも億劫なことだと解る。

脳を覚醒させるが如く頭を振り、部屋を後にした。向かう先は一つ、リビング。

「うー……気持ち悪い」

悩み顔で胸元を強く握ったまま、リビングの食器をあさる。行動がスローなのは、公博を起こしてはいけないという配慮以上の理由があるようだ。

今、花穂の身体を支配しているのは警笛のように響き渡る頭痛と目眩。それに伴う吐き気だけだったから。

パジャマの裾をずりながら、食卓につき昨日の夕食をゆつくりと一人で片付け始める。花穂にとっては珍しいことではなく、ここ二年の間に何度も繰り返されたことだけれども。胸に違和感を覚えずにはられない。

虚ろな黒瞳は目の前の皿すら捕らえてはおらず、当然のことながら食事を楽しんでいる様子は微塵もない。むしろ胃の中に食物が蓄積されるほどに、眉間の皺は深くなり右手の上下運動は散漫になっていく。

「もういらない……」

そう呟いたが、テーブルの端にある封筒が花穂の心と意識を捕らえて離さない。脳裏に浮かぶのは、兄の笑顔。心に爪を立て、再びスプーンを口に運ぶ。

――しかし、同時に喉を駆け登ってきたのはすえた臭いの胃液。逆流。ゴボゴボと鳴る水の濁音とともに、マーブル模様のそれがフローリングの床に大量に吐き出された。

「うあああつ、はあ、はっ……っっ」

なおも唇の端から滴り落ちるそれは、花穂のお気に入りのパジャマをも汚しシミを作る。落ちたのは本当にそれだけなのか、窺い知り得るのは身体中に浮かぶ玉のような汗だけ。

続く哀咽に、冷たい床に座り呼吸を調えようと試みるが、狭まった器官は酸素を強く求め荒い息を繰り返す。目尻に浮かんだ涙が、ギリギリのところでは睫毛に張り付いている。震えるだけじゃ嫌なのに。

「おふろ、はい、ら、なきや……っ」

自身を鞭打つように奮い立たせるが、おぼつかない足取りは壁という支えを必要としてしまう。一人でも立てるのに、立ちたいのに、それは一体、誰の叫び？

壁につかれた指は汚れたまま、ずる、ずる、と一定のテンポで引きずられていく。白壁は自由のキャンバスとなり、指先は鋭利に孤を描く。空間までも引き裂くそれは、まさしく軌跡。立てられたのは絵筆か、爪か。

ガラガラっとくぐもったお風呂場の扉の開閉の後には、廊下の白い右壁に長く四本の爪痕が残った。

その日の朝。

おとといから新宿の某ビルの四階を貸し切って開催された、写真展会場からは賞賛の声が次々と湧き上がっていた。

「嗚呼！ 今回の写真もどれも美しいですわ……」

「息を飲むって、こういうのを言うんだな。俺、知らなかったよ」「まるでヤマトナデシコのようなダ！ ゼビこのサクラある場所二行ってみタイ！」

その声が絶えることはなく、人々の目や表情からも輝きばかりが

溢れていた。

会場は季節に合わせるように写真を分けて、四つの区画から成り立っていた。写真に限らずこうした展覧会では、レイアウトや演出も『美しく見せる』ための大切な要素の一つだ。

公博はそれらのスペースのうち、入口から見が一番奥の冬の会場にいた。スーツは昨日と同じ黒だが、ネクタイとシャツは色合いがけんかしないものを選んで着ていた。

けれどその姿はどこか滑稽だった。公博の後頭部には自身を主張するような寝癖。出かける前には、洗面所にあったパジャマを手洗いしていたし、電車にも慌てて飛び乗ったのだから、鏡を見る余裕はなかっただろう。しかし、寝癖ひとつで公博を嘲笑するような人はここにはいない。むしろ微笑ましく思っただろう。

写真展を開くにあたり、お世話になった方々への挨拶回りが一通り終わったところだった。人付き合いが苦手なわけではないが、それでもふう、と溜息が洩れた。そんな時。

「よう、博。今度の写真もさすがだな」

「平井さん！ お久しぶりです」

疲れも忘れて、公博は口髭を生やした長身の男性へとかけよった。

「わざわざ来てくれたんですか！？」

「まあな。元気そうじゃないか」

平井は公博と同業者だった。三十代の平井はがっしりとした体格で、日に焼けた浅黒い肌は、実年齢よりも逞しい風貌を醸しだしている。

平井は公博を上から下までよく眺めてから、豪快に笑い公博の背中をバシバシ叩いた。

その少し過剰な再会の仕方に、公博は疑問を感じつつも思考をやめた。

「エジプトでしたよね？ どうでした！？」

「よかったよ。やっぱり日本からは見られない景色が多いな。まあ、暑かったけどな」

苦笑いをしつつも、その満足げな口元。さぞ綺麗な写真が撮れたのだろう。公博の好奇心に満ちた目は、さらに光を増す。

「今度お邪魔させて下さいね！」

「お前も来いよ。日本にいないでさ」

「平井さん……」

公博の心を貫き蘇る、映像。吐瀉物のこびりついたパジャマ、壁の鋭線。

「冗談だ。分かってるさ、お前の心配の種ぐらい。それより、今度ちよつと時間あるか」

しかしそれは一瞬で。

「二十日以降なら平気ですけど」

当然のように現実の髭の男へと戻る。

「紹介したい人がいるんだ、お前の写真のファンでな」

「はあ……」

「ま、詳しいことはまた電話するよ。じゃあな」

ポンと肩を叩き、平井は一方的に話を打ち切って行ってしまった。

「あ、ちょ、平井さん！」

その広い背中が長身だから見つけやすいはずなのだが、公博にはもう見えなかった。

そんな適当な、とぼやくが笑いも混じっていることに公博は気付いていた。両親の死以来、自分が振り回される存在はそう多くはなかった。そんな貴重な友人の来訪に感謝した。

「橘先生！」

「うわっ、は、はい？」

「お昼はどうされますか？」

「あ、お昼。もうそんな時間ですか、そうですね……」

過去と現実の狭間を行ったり来たりしているところへ、職員の声で公博の意識はあるべき場所へと押し戻された。

外では春の陽気はどこへやら。空には不気味な暗雲が広がり、午後からは土砂降りの雨が降り始め、その雨は夜になってもやむこと

はなかつた。

### 3枚目 一葉蘭

出会ってどうなるか。

結果なんて少しも考えてはいなかっただろう。

願わくは二人の巡り会いが良き縁とならんことを。

じりじりと肌を焼く紫外線が一際強く、地球温暖化は本当だったんだと普段は気にもとめない話題に花が咲くような、そんな暑い日。「おつかしいなあ……」

公博は地図を片手に、ある喫茶店を目指して道の往来を徘徊していた。

事の始まりは展覧会の最終日。紹介のことで平井から電話を受けて詳細を聞けば、相手は彼の親戚らしい。

『お前らにとつて、プラスになるからよ』

そんな一言を残して、平井は変わらぬペースで電話を切った。

後には取って付けたように、ファックスで喫茶店の名前と地図が送られ、それは今公博の手元で汗を吸っているというわけだ。

「だめだ、分かんねえ」

暑さで麻痺した思考と身体が悲鳴を上げ、額から流れる汗を手で拭った時だった。

「橘先生」

女性特有の柔らかな声が公博の身体をくるりと反転させた。

視界の先には、白の日傘を差した着物姿の女性が小さく右手を挙げていた。逆光で顔だけがちょうど見えないが、彼女が件の人物で

あろうことは何となく分かった。

「す、すみません！迷ってしまいました」

「いいえ。それよりも室内なかに入りましょうか。ここは陽射しが強いですから」

慌てて駆け寄った公博に、女性は少しも態度を崩さずに、自分が向いている方向を指差した。公博はどうやら店を通り過ぎてしまっていたらしい、その先には求めていた扉があった。

喫茶店は個人経営の店らしく、客席は静かでこじんまりとしていた。木材を自然な形で使用したテーブルと椅子。橙色の柔らかな光源を包むように天井から下げられた照明。そのひとつひとつが、訪れた人の心を癒してくれる。

「改めまして、和泉蘭いずみらんです。今日はお忙しいところを、ありがとうございます」

店の一番奥の二人席に通された二人は同時に腰を下ろすと、彼女の方が先に丁寧な挨拶をした。今更ながらも、公博も自己紹介。

外では顔が見えなかった目の前の人物を、そこで公博はまじまじと観察した。覚えているかは別にしてそれが公博の癖なのだ。職業病とも言うべきか。

耳の下あたりで揃えた黒髪に、切れ長の同色の瞳。着物は赤帯と黄色の腰紐で渋い臙脂の物を締め、まるで日本人形のような気高い気品が漂う。しかしすらりと伸びた背筋は凜としていて、ちらりと覗くうなじは温かみのある白さで冷たい感じは微塵もない。

「先生？　どうか？」

「はっ！　いえ、大丈夫ですっ」

何が大丈夫なのか、ずいぶん長く凝視していたらしい公博はかぶりを振った。その仕種がおかしかったのか、和泉は小さく笑みを零した。



「私のこと、平井の叔父さまには何と聞いていますか？」

「親戚としか……あ、おじさんということは、和泉さんは平井さんの姪なんですね」

「ええ、幼い頃から可愛がってもらいました。でも、叔父さまらしいですね。今日のこと突然でしたし」

「そうなんですよ！　こんな適当な地図で、辿り着ける人いないですよ。全く何を考えているんだか」

いかにもな盛大な溜め息をついたところで、二人の失笑。共通の話題をネタに盛り上がるのは、緊張しているよりいいだろう。

『お待たせ致しました、アイスコーヒーです』

そこへタイミングよくグラスが運ばれてきた。よく冷えたその茶色の液体は氷の硬質な音をたて、二人は同時に口をつけた。

「和泉さんは俺の写真、平井さん経由で見たんですか？」

「いえ、展覧会で直接拝見しました。私も出展していましたので」

「出展、と言いますと」

「私、書道塾を経営しているんです。個人でも活動しております、それで」

「それじゃあ和泉さんも先生じゃないですか！」

「生徒からは確かにそう呼ばれていますけど。まだまだ日々精進ですわ」

和泉は謙遜するでも否定するでもなく、ただ事実と目標を口にしました。

名前の蘭より、その立ち振る舞いから凜と言った方が彼女には当て嵌まる気がしていたが、やはり女性は強いらしい。

コーヒーにミルクを注いだ時のように、公博の胸に何か温かいものが優しく溶けていった。

それから談笑は、グラスの中の氷が液体に変わるまで続き、会話が途切れることはあれど二人の表情から笑みが絶えることはなかった。

喫茶店を出た時、外の陽光はだいぶ柔らかくなっていて、少し肌寒さを感じる程だった。駅までの道もちやっかり聞いて、さあ帰ろうと公博が踵を返した時。思い出したように和泉はそれを公博に手渡した。

「私の名刺です。お時間ある時に連絡して下さいな。お待ちしていますから」

それには確かに彼女の名前と、パソコンのメールアドレスが記載されていた。右隅にはワンポイントに簡略化した蘭の花。

「それでは、また」

話の合間ではなく、わざわざ去り際に手渡した意味に公博は気付けただろうか。

些細なことにも、人の気持ちというのは現れるものだ。悩むべきはそれが自分に対して良いものでも悪いものであっても現れてしまうことと、良いものである方が他人はそれに気付きにくい場合が多いことだ。本人も気付かないケースも含めて。

「あ、和泉さん。ちよつと」

「はい？」

呼び止めた時には懷に手を伸ばし、それを構え、こちらを伺った瞬間にシャッターを切っていた。趣味用の小型のタイプを使う機会はそうなかったが、持ってきてよかった――そんな手つきで大事そうに公博は銀色のそれをしまった。

「それじゃあ、また」

その日から公博は決まって木曜日に、ある喫茶店を訪れるようになった。頻度は毎週ではなかったが、和泉書道塾の休みであることが少なくとも関係しているらしかった。その師範も決まって同じ

ようにその喫茶店を利用していたからだ。

橘公博に和泉蘭に関してのインタビューをしたら、大半が即答で返ってくるだろう。着物と料理が好きなこと、苦手なものは電子機器。公博より二歳年上であること、コーヒーはブラックで飲むことなど、諸々だ。

ある日の会話ではこんなことがあった。

「橘君の、仕事部屋が見てみたいな」

「紅蘭先生こうらんに見て頂けるようなところじゃないですよ」

「先生はもうやめましょう？ お互いきりがないもの。それに私の仕事してるところは見たのに、ずるいわ」

「分かってますよ、和泉さん。冗談です」

敬語も笑いの種になり、呼称も変化したのが親しさの表れかどうかはともかく。

かくして公博は書道家、和泉蘭を自宅兼仕事部屋に招待することとなったのだった。

#### 4枚目 電幕

二人の賢人の出会いは、良い関係を築くこととなった。

だがもう一つの糸が絡まる時、何が起こるか。

未来を予測しうる者は、そこにいる貴方と耳聡いあの少女のみ。

時は流れて、六月某日。和泉蘭は写真家、橘公博の豪邸の前に立っていた。

「橘先生、こんなに稼いでいらつしやったの」

蘭は目を丸くして目の前のお宅の扉を仰ぎ見る。

今日も決まって着物だが、自分の名前と同じ蘭の花が描かれた薄緑の着物に、帯は黄色を合わせたもの。皺も少ないうえに、その布が放つ光沢から新しい物であることは間違いない。

だが、その着物もそれ以上に価値のある物の前では霞んでしまう。

「あはは、この家買ったのは俺じゃないですよ。父です、橘一成」  
たちはないっせい

「お父さまが？」

鸚鵡返しに聞き返し、『あ、あの事件』と呟いたところでしまった、というように蘭は口を押さえた。

公博の父、かすなり一成こと橘一成は写真家であつた。事故があつた二年前の当時、蘭は師範の資格を取得した頃で、その衝撃的なニュースを鮮明に覚えていたのだ。

だがポストの中に手を差し入れ、封書やハガキに目をやっていた公博は気にするそぶりなど欠片もなく、それらを手にいつもと同じ様子で自宅の扉を開けた。

「さあ、どうぞ」

それより少し時計の針を巻き戻して、三十分ほど前。

外はもう日が昇っているというのに、花穂は目を覚ましてベットの片隅で丸くなっていた。

睡魔はとうに降りてきていて理性との格闘にも敗北しているのに、一向に瞼が落ちる気配がないのだ。羊も数え飽き、難しい実用書は内容が頭に入らず万策は尽きた。あとはこのまま一日を過ごす、その選択肢のみだった。

身体の向きを右へ左へと変えては、沸騰し始めたお湯のように胸の奥から湧いてくる何かを鎮め振り払う。あれを見つけた時からだ。

その日は身体の調子がよくて、今なら何でも出来そうな心境だったから、洗濯をしたのだ。主婦なら毎日していることだろうが、花穂にとってはそれだけでも賞状ものだ。

鼻歌を口ずさみながら上着やらＴシャツやらを放り込んだところで、ヒラリと何かが宙を舞った。

すかさず手に取ったそれは名刺だった。

- - 仕事で大事なものかもしれない。そう思ったのだろう、花穂はそれをよく見ないで公博の部屋へと急いだ。

『何やってんの、兄さん』

ノックをして部屋に入れば、公博はごみ箱をひっくり返しているところで、見渡すとベットのの上にクローゼットの中の洋服やスーツが散乱していた。

『ああ、花穂。名刺知らないか？ 大事なものなんだ』

その時こちらを振り返った公博の、カメラを構えた時のような鋭い眼差し。真一文字に引き結ばれた口。

とくん、と胸が張り裂けそうな衝動。分かりたくないのに、分か

ってしまった。

結局、花穂はそれを返せずに読みかけの本の間に挟んでしまった。以来、記された名前が浮かんでは消える。まるで激しい恋のよう。

「どんな女<sup>ひと</sup>、なのかな」

知らないうちに声に出していた花穂は、喉の渴きを覚え、仕方なくベットから起き上がり部屋を後にした。窓の外で響く、女性の笑い声を背中で聞きながら。

針を戻して、部屋の中。

蘭は公博の家の広さに開いた口が塞がらなかった。両手を伸ばしてもまだ広さのある玄関の次に通されたのは、二十畳ほどのリビングだった。

足袋越しから伝わるフローリングの艶やかさはそのままスケートができそうなほど。木で統一された家具は一般家庭の雰囲気と変わらないものの、その重厚で繊細な装飾はとてつもない価値があるに違いない。お洒落なライトを目で追うと、天井はどこまでも高く、自分の一番大きな作品を吊してもまだ余裕がありそうだった。

「ちよつと待ってて下さい。冷たいもの持ってきますから」

「え、ええ」

肯定を示したが、おちおちソファに座る気になれず、蘭は居心地の悪さに一つ息を吐く。

「帰ったら、我が家は犬小屋かと思うわね」

「ははっ。犬小屋はないでしょう、和泉さん。それに金魚と猫の置物があれば、犬は放っておかないだろうし」

リビングからダイニングキッチンへと消えた公博が、お盆を持って戻ってきた。自家製の緑茶を前に『うん、うまい』と早くも口をつけ、自画自賛。客人の蘭より先にソファでくつろいでいる。こ

れでは喫茶店にいる時と変わらない。

「写真はないのね」

「飾ってあればいいってもんじゃない」

- - と、父が言っていました、と公博。

またも踏んでしまった、見えない地雷に蘭は激しく自分を責めた。公博ともっと親しくなりたい、そんな安易な理由で訪れるべきではなかった - - 薄く引いた口紅が落ちるのにも構わず蘭は強く唇を噛み、そして振り返った。

「橘先生？ カメラを見せてくださるのではなくて」

「そうでした！ 座って下さい、取ってきます」

何か忘れてるなって思ったんですよ、と間拔けな声が長い廊下の向こうに吸い込まれていった。

上手く話題をすり替えたことに蘭はほっと胸を撫で下ろし、一人気合いを入れ直してから、緑茶で喉を潤した。

- - そして時は重なる。

「うわっ」

「ぶ」

公博がカメラを片手に一階まで降りてきたところで、花穂と出会い頭にぶつかった。かなり痛いのか、花穂は鼻を押さえたまま。

「酷いよー、兄さん」

「わ、悪い、悪い。まさか花穂が起きてるなんて思わなかったから。そういえば、今日は調子いいのか」

まるで我が子を労る母親のような手つきで、公博は妹の頭をぽんぽんと撫でた。

『え、う、うん。今日はね、げん『橘君？』

言い終わる前に、少し高い女性の声に遮られた。公博はすぐそれに気付き、『和泉さん』と彼女のもとに向き直った。公博がなかな

か戻って来ないから、不信に思っ て見に来たに違いない。

花穂の低い目線では公博の身長で隠れていた、声の主が視界に現れた。

その立ち姿、凜とした笑顔が花穂の小柄な瘦躯を貫く。森の中の熊に出会ったかのように居竦み、全身は身動き一つとれない。

「すみません、和泉さん。花穂がーあ、妹なんですけど」

「こんにちは、お邪魔しています」

反射的に、蘭は幼少の頃より叩き込まれた慣例で、丁寧に礼をした。

「可愛い妹さんですね」

誰もがその形容詞をつけてしまうくらい、花穂はその象徴だった。身長145センチの小さな妖精。

「でしょう！ 俺が写真以外で自慢できることは、花穂のことくらいなんですよ」

花穂は廊下に立ち尽くしたまま、二人の会話をどこか遠くで聞いていた。あんなに知りたかった相手を前に、自己紹介することもできない。餌を待つ魚のように口をばくばくさせるばかりだ。

「仲がよろしいんですね」

だが、次に発せられた言葉の奥に、花穂は言葉以上の何かを感じたのか強く両手を握った。

「……じゃないわ」

談笑していた公博と蘭には、うまく聞き取れなかった。二人の表情に浮かぶは、困惑の色。

「妹なんかじゃないわ！ あなたは年の離れた兄妹だって思ったかもしれないけど――学校だってちゃんと行ったし、お酒も飲める、もう大人よ！」

きつ、と花穂は初対面の女性を見据えていた。レンズを引き絞るように、捕らえたまま離さない。

だが、『あ、あの』と蘭が口を開いた途端に、憑き物が落ちたかのように我に返った。耳までその白い肌を朱に染めて、すぐさま階



段を駆け上がっていつてしまった。

目のやり場というよりも、心の置きどころに困る雰囲気。

「妹さんに、嫌われてしまったみたいね」

努めて明るく振る舞った蘭。彼女には花穂の言葉の奥にこめた意味が分かるだろう。『今日は帰りますね』と着物の裾が翻って風で膨らんだ。そのせいか蘭は次の瞬間、危うく転びそうになった。

「まったく、しょうがないやつだなあ。そんなに鼻が痛かったなら言ってくればいいのに」

廊下を抜けて、玄関で蘭が草履を履き終えたら、ようやくお互い落ち着いたようだ。パチリと目が合った。

「花穂が八つ当たりして、すみません。でも根はいい子なんですよ」  
腰は低いままの彼の笑顔がなんだか滑稽で――もしかしたら私の気持ちも気付いてないのかしら、と蘭は帰り道をうつむいて考えずにはいられないのだった。

その夜。

向かい合う一つの扉が静かにノックされた。

「花穂、入るよ」

返事はなかったが、躊躇することなく公博はするりと部屋に入った。暗闇の中、壁に右手を這わせるとスイッチに当たり明かりが点いた。

「ごめんなさい」

ベットの脇で膝を抱いて花穂は座っていた。左手の指の間には、返しそびれた名刺。

「そんなに鼻が痛かったなら、言ってくんなきゃ分からないぞ。大

丈夫、俺は怒らないから」

公博は明るく言った。実際、それほど怒っていたわけではないのだ。和泉さんは喫茶店の方が落ち着くのかもしれない――今日を振り返りそう考えたのか、公博はまた瞳に穏やかな光をたたえた。

「違う、そうじゃなくて」

眉に皺を寄せる花穂。突然の光が眩しいのか、兄の鈍感さに呆れているのか、あるいは両方か。

その間に、公博は彼女の指に挟まった捜していたものに気付いた。

「お、なんだ、見つけてくれたのか。ありがとう」

「みー君。ちが……！」

公博が部屋を出ようとしたので、花穂はそれ追おうとしたが足に力がうまく入らず、その場で見事に転んだ。

「花穂ちゃん大丈夫？」

苦笑を噛み殺す兄。

「う、うん。覚えてたんだね」

はにかみながらも、つられて笑う妹。

「ああ、真似してみた。なつかしいな」

公博が右手を差し出すと、花穂はその手を掴みふらつきながらもその足で立った。大きな手に、小さな手。それは幼い頃に二人が呼び合った名前。

「ご飯、冷蔵庫にあるからな」

思い出に後ろ髪をひかれつつ、ドアノブに手をかけた。

「あのひと。兄さんのこと、きっと好きだよ」

後ろから想いの矢に討たれた。その矢はどこに刺さったのか、公博はそれを隠そうとし、口角を思い切りあげた愛想笑い。

「そう、かもな。でも俺には、分からないよ」

自室に戻った拍子に、公博はずるずるとその場に座り込んだ。硬い扉が今は支えた。

さっきと同じ暗闇の中、ポケットで携帯が震えた。明滅する光で顔だけが浮かんだ。

『もしもし。なんだ、お前か。ああ、見たよ。必ず行くよ』

電話を切つても公博は床に座り込んだままで机の上の一眼レフだけが、彼の姿を捉えていた。

ベット脇のサイドテーブルには、同窓会のお知らせと書かれたハガキが二枚、暗闇の中ぼんやりと光を放っていた。

## 5枚目 フレームアウト

誰もが一度は間違いを犯す。

誰かにとつてはそうでなくとも、本人には許せないことで、その  
事実は決して消えない。

それがどんなに小さなあやまちであろうとも。

その夜、公博は沈痛な面持ちで帰路についていた。俯く視線はまさしく、考えごとの印。

だから家を出る前の出来事なんて、どこかに置いてきてしまっていた。

「あ、あれ？ 開いてる」

鍵を閉め忘れたのかいなか。視線はなおも迷いつつも、足先は自然と部屋へと向かう。

廊下を抜けて、階段を上った先。だがそれは当分後のこととなる。

「花穂っ！」

瞳孔が開くよりも先に、駆け寄っていた。冷たい階段下の廊下に横たわる何か。

それはうつぶせの状態の妹の姿であり、頭の方には彼女の私服が散乱。同じように乱れ、異常に汗を吸ったパジャマは嫌に湿っていた。

「花穂、花穂！ 起きろ、しっかりしろ」

身体を激しく揺さぶり、赤い頬をぴたぴたとやるが、反応は希薄

だ。唯一、眉間が小さな皺を刻む。額に手をやると、そこはやはり熱かった。

「ま、待ってろ、今病院に連れて行ってやるからな」

激しくドアを叩くような鼓動が、リビングの固定電話に救いを求める。

熱だけではない、階段から落ちて頭を打っている可能性もあるのだ。予想だにしない現実が、ズボンのポケットにある携帯電話の存在を消しさる。

「みー、くん……？」

意識の戻った花穂が小さく身体をみじろぐと同時に、公博は妹を抱きかかえた。

ソファーに置いてあったタオルケットで彼女を包むと、大丈夫だからなと何度も繰り返しながら、庭にとめてある軽自動車に乗り込んだ。

職業柄、車で移動することはあまりなかったが、公博は一応運転免許は持っていた。

しかし車のキーを差し込む直前で、反射的にその手がハンドルを叩く。

「くそっ」

鈍い痛みが、公博を責める。

さっきまで酒を呑んでいたのだ。酔ってはいないが、検問でもしていれば間違いなく飲酒運転で捕まってしまう。

「みーくん……？」

助手席の花穂が、その勢いでたじろぐ。

高熱のせいで虚ろな目が、最愛の兄を求めて潤む。

「い、今行くからなっ」

ややあつてだが、彼の脳内天秤は確かに車を走らせる方へと傾いた。

鍵をひねると、エンジンは数回熱い咆哮をあげながら、夜の住宅街を駆け抜けていく。

零時を過ぎた道路は対向車もなく、運転手はアクセルをより強く踏みしめた。その表情はかつてないほどに固く、眼光は鋭い。ただただ、早くという思いをスピードメーターが指し示していた。

そもそもの始まりは公博が家を出る前、数時間前に遡る。

今日もそろって二人は、寝癖をつけたまま玄関で向かい合っていた。

「俺が出たら鍵、ちゃんとするんだぞ」

「分かってるよ」と了解の声には、こんこんと乾いた咳が交じる。花穂は寝癖を兄に教えてやる余裕まではないようで、水玉模様のパジャマの袖を口に押し付けながら、

「本当に大丈夫だから」

と、空いている方の右手を申し訳程度にひらひらさせてみせた。

だが、逆にそれは公博の背中を押す結果になったらしい。前日に散々、「行くなって決めたならそれを通すように」と花穂自身が説得したからだ。

「なるべく早く帰ってくるからな、ちゃんとふとんに入ってるんだぞ」

命令口調で念押しをした公博は、何度も後ろを振り返りたい思いで、風邪気味の花穂を残して我が家を後にした。

ところが車を走らせて十分もしないうちに、フロントガラスには無数の水滴がつき始めた。

長い赤信号がようやく青に変わった時には、ワイパーが激しくその身を動かさざるを得なくなっていた。

「こんな時にっ」

悪くなる視界が、よりいっそう公博の感情を高ぶらせる。

運転に慣れていないのだから、仕方がない。だが仕方がないことで終わらせてしまったら。

公博の脳裏に一瞬、両親の顔が浮かび、それを振り切るように真面目なドライバーは初めて、赤信号の道にアクセルを踏んだ。

出掛けたのは、中学時代の同窓会に出席するためだった。有志だけの集まりらしく、人数は多くはないらしい。

だが公博は成人式を、カメラマンになったばかりの多忙のために欠席していたから、少人数なれども出席したかったのであるう。

数年ぶりもしくは、それ以上の級友達との再会だった。

「あつた、ここだ」

それなりの時間をかけて着いた目的地は、よくある全国チェーン店の居酒屋だった。油と酒が染み渡る使い古されたような店内は、意外にも静かで煙草の煙は少なかった。

店員の案内で店の一番広い部屋の扉を開けると、公博は懐かしい声に包まれた。

「博！ やつときたなー」

「遅いぞ、このやる」

「嘘、橘君！？ 全然変わってないねー」

年月はたてど、人々の中での自分のポジションというのはあまり変わらないものらしい。

「みんな、久しぶり」

と、片手を挙げるやいなや、公博は部屋の中へ中へと押し込められてしまった。席に着くと、まずは乾杯。皆、色鮮やかなアルコールの入ったグラスを片手に和気あいあいとしている。

成人式に出なかったために、近況やら何やらを矢継ぎ早に質問攻めに合う。

これが戦なら兵糧攻めで落とすところだろうが、公博はやんわり笑い返すことで回避することが出来た。

それは皆が、彼の両親の死を知っていたからだ。噂話というのは、広がるのが早い。それが訃報や吉報であるなら尚更。

「たーさん。こつち来て呑もうぜ」

「おー、剛つよし。この間ぶりだな」

談笑している人の脇をすりぬけて公博が隣に座った人物は、坂田剛。同窓会の前に電話をかけてきた、その人だった。

「たーさん、今日も寝癖つけたままなのな」

「え、嘘。ってお前こそ何だよ、その腹は。食べ過ぎじゃないのか」「いいの、いいの。メタボリックじゃないから」

中学時代は野球にあけくれ、坊主頭で汗を流していた少年は今や、酒豪の坂田に変貌を遂げていた。髪は明るい茶色に染まり、ちよつと出たお腹がこれまでの数年間を主張している。

けれど彼と公博は親友さながらの長い付き合いだったから、お互い驚きはなかった。そこにあるのは信頼。

「花穂ちゃんは元気か」

「家で寝てるよ。急に暑くなつたしな、風邪ひいたみたいなんだ」お互いグラスは既に空だが、あまり飲む気配はない。

「相変わらず、かわいいんだろうな」と坂田がぼやくと「お前にはやらんぞ」と公博はすかさず待ったをかけ、似たようなノリでしだいに宴会はお開きとなった。

一緒に帰ろう、と坂田がレジの前まで来て、公博がトイレに立った。その際、坂田は近くにいた級友達の会話を聞いた。

「そつえばさ、今日鈴木さんに会ったか？ 来てるって話だったんだけど」

「マジで。知らねー、早く言えよな。でも女は化粧とかで変わるかな、わかんねーかなあ。千鶴ちずくつち」

鈴木千鶴。

それはかつて、公博が初めて一度付き合ったことのある女性の名



前だった。

「すみません！ 急患なんです、お願いします」

着いた先の夜間病院で、怒鳴り込むように飛び込んだ公博に余裕などなかった。汗とも雨ともとれる滴が、髪に張り付いている。

だが、頭を打っているかもしれないことを告げると、

「今日は、専門の医師が不在ですね。青葉総合病院の方へ行ってください」

と眼鏡をかけた若い男性医師はそっけなく言い放った。

『あんな医者じゃないのかよ』

そんな身勝手な言葉が出かかり、公博は大きく息を吸った。

吐き出す二酸化炭素が、肩の力を抜き、冷静な思考を呼び戻してくれる。

「わかりました、失礼します」

ここには用はないと悟った公博は、素早く踵を返すと、背中に背負っていた花穂を再び助手席に寄せ、自身は新たな目的地へと車を走らせた。

そしてトイレから出てきた時、公博の前に立つのが、鈴木千鶴、その人だった。

「久しぶりだね、ひろ」

だがその時公博は、目の前の人物よりもその後ろにある、花瓶と折り紙のインテリアに目を奪われていた。千代紙の折り鶴が郷愁を誘う。

濡れたままの両手は無意識にぱたぱたとさせていた。

だが彼女は目線を合わせずにいたから、それには気付かない。反

応を待ちきれないとばかりに、再び口をあける。

「あ、あれー。もしかして忘れちゃったとか？ そう、そうだね、博はそーゆーやつだったし」

そこで押し黙ってしまふ。

ロングの色素の薄い髪。自然だけれど華やかさのある薄化粧が、形のよい目と口元を演出している。たれめの眉と頬の赤みがほどよく幼さを表していて、かわいい雰囲気の女性だ。

毛先をくるくると人さし指で持て遊んでいる。どうやら彼女の癖らしかった。

「すみませーん。この鶴、どなたが飾ってらっしゃったんですかね」

「ちよつと」と千鶴はようやく本人が気付いていなかったことを理解したが、背中に声をかけても写真家、橘公博は気付かない。

「あ、それですか。バイトの田口君の趣味なんですよ。よかつたら、持つて返つてくださっても構いませんよ」

「どうせまた持つてきますから」と大学生風の愛想のよい店員はスマイルを見せる。

「あ、そうですか。ありがとうございます」

それでは、と慌てて持ち場に戻っていく店員には目もくれずに、公博はその鶴を大事そうに上着の胸ポケットにしまった。

「もう、博！ 聞いている！？」

「わあっ」

飛び上がる公博。

それはどこか懐かしい声。姿は変わっても、記憶の片隅に残るもの。

「なんだ、鈴木さん――あ、千鶴か。久しぶり」

「その久しぶりの再会でシカトとはやってくれるじゃない」

「い、いや。わざとじゃないんだって」

「ほーお」とまだ怒りが鎮まらない証拠に眉が少々釣り上がっている。両腕を組むと白のブラウスのしわが深くなる。

「とりあえず、外で話さない」

ここだと人が気を使うし、と千鶴は今さらながら周囲を気にしはじめた。忘れていたが、ここはトイレの前である。

「あ、駅まで送るよ」

付き合っていた当時と似たセリフを口にした公博。駅までの道を遠い昔に重ねながら、二人は坂田も加えて駅を目指して歩いていく。

未だ人のたたない居酒屋の店内で、相方を失った花瓶の中の名もなき花が、一枚花弁を落として揺れた。

## 6枚目 偽色と紫陽花と

秘められた思いがあった。

誰の心にも。

そうして変化は自らの足音のように訪れ、いつしかそれは花のよう突然、散る。

降り止まぬ雨滴を滴らしながら公博が花穂を病院へ担ぎ込んで、CTを撮られたが異常はなかった。だが熱が高いこともあり、医師は一日入院を薦め、公博はそれに同意した。

もちろん公博も付き添いとして、病院で一日を過ごした。

そうして翌々日。

普段と変わらぬ仲睦まじい兄妹の姿がそこにはあった。

「も、もう入らないよ」

「だめだ。はい、あと一口」

花穂は突き出されたスプーンを睨みつけ「プリンじゃだめ？」と聞き返すが、

「だめだ」

と一蹴されてしまって、唇をとがらせた。

少しの変化は公博が頑固な態度を取ることだが、花穂の微熱はまだ続いていること。それに階段から落ちた拍子に作っただけ、右側頭部のたんこぶのことを考慮すれば仕方のないことだった。

花穂からすれば、病気を口実に我が儘を聞いてもらおうと考えていたのだから、むくれるのも無理はない。だが兄が一時も自分の傍

を離れずにいてくれることは、やはり嬉しかったのだろう。

「じゃあ後でプリンね」と最後の一口を口に入れた。

公博はそれを見て心底胸を撫で下ろし、妹の頭を撫でてやった。

おとといは寿命の縮まる思いだったから、これが現実だと確かめたい。食器を片付けるのも億劫で、カメラの手入れですら花穂の部屋でしようかと思案した時だった。

二人の耳に聞き慣れた高音のチャイム音。誰だろう、と見つめ合う兄妹を尻目に来訪者達は静かに玄関に佇んでいた。

梅雨の終わりを告げる、蝉の鳴き声と夏の香りとともに。

数分して階段を昇る小気味よい音が二重に聞こえたかと思うと、扉がノックなしに開いた。

「花穂。平井さんがお前の見舞いに来てくれたぞ」

「え、どうしよう。私パジャマだよ」

狼狽する花穂に、平井は

「病人は気を使うにあらず、だよ。花穂ちゃん」

と、妙な格言を言ってドアの隙間から顔を覗かせた。

「下でフルーツ切って持っていくからな」

公博と入れ代わりに、平井は部屋へと入ると彫りの深い顔には似合わない派手な花束を「これ、お見舞いね」と花穂に渡すと、公博が座っていた背もたれ付きの回転椅子にどっかと腰を降ろした。

花穂は受け取った花束をどうしようかと右往左往しながら、

「ありがとうございます、ほんといいです」

と、とりあえずベット上部の棚に花粉が落ちないように、そっと置いた。

「わざわざ来てくださって、ありがとうございます。お花まで。兄さ――みー君に聞いたんですか」

「昨日、博のやつに電話したら病院だって言うからさ。驚いたよ、

はっはっは」

「そうでしたか」

「思ってたより元気そうでよかったよ。橘先生、もう二年だもんな」  
「そう、ですね」

花穂は返答に詰まり、曖昧に笑う。

まだ治り切っていない人のところに見舞いとは、おかしいと思うかもしれない。

けれど平井に、その常識は当て嵌まらない。

本来の性格もあるがそれ以上に、平井は橘一家と親交が深かった。何故ならカメラマンとして独立する前は、橘一成の助手を務めていたからだ。

一成は人あたりのよい人物だったから、仕事が関係していなくても平井は家に上がらせてもらい、ご飯をご馳走になったり、若い二人の面倒を見たりしたものだっただけ。

「それにしても暑いねー」

しばしの沈黙と過去への郷愁を、平井が右手をうちわのように扇ぎながら破った。

「そう、ですか？ エアコン強くしましょうか」

けれど花穂はまた口元だけで笑い、リモコンで室内温度を少しだけ下げた。

「悪いね、俺暑がりなもんだから。梅雨も明けたし」

「そうですね」

花穂はどうしてだか曖昧にしか笑わない。

それもそのはずで、花穂は昔から平井が少し苦手だった。

嫌いという感情とは違う。

この見えない気持ちを、何と表現したらいいのか。例えるならそう。噛み合わせづらい会話やその出で立ちが、花穂の神経を針で刺激するような感覚。そして、得体の知れない者に対する息苦しさ、恐怖感。

エアコンのせいだけではない、冷たく纏わり付く空気に、花穂は

自然と両腕をさすった。

「ところで花穂ちゃん」

「は、はいっ」

視線を慌てて男に戻すと、彼はじつと自分を見つめていて、花穂はつい顔を逸らしてしまった。

その目は公博がカメラを構えている時の射るような目に似ていたが、それとは明らかに異なる性質のものだった。

だが突然に、男の顔が花穂の目の前にあった。

ごくりと生唾を飲み込むと、平井の手が自分の顎の下にあることに気付き、無理矢理顔を向かされたのだと理解した。

そして目の前の男は牙をむく。

「いつまで兄妹ごっこを続ける気だい？ 博は君のものなんかじゃないだろ」

長い髭のある口が、ゆつくりと自分に近付いてくるのを感じながら、花穂は心で強く最愛の人の名前を呼んだ。

一方、階下に降る公博が向かった先はキッチンではなく隣のリビングだった。玄関から入って、一番近い部屋。

そこにはもう一人の訪問者がいた。

「どうして、来たんですか」

「ごめんなさい。一人じゃなければ、お見舞いくらいは受け取ってくれるだろうと思って」

蘭の着物は夏色に、生地も薄手のものに変わったというのに、頻繁に口に使っていた贅辞は言葉にならなかった。

「怒っているわけじゃありません。顔を上げてください」

次いで出るは、怒気を孕んだような一言。

陰る表情を見ると、自分の方が悪いことをしているようで始末がよくない。公博は盛大に溜息を吐いた。

とりあえず座るように手で促すと、することがなくなつてどちらとも次の言葉を紡げずにいた。

こんな時、脳裏に浮かんでくるのは当然よいことではない。

『ひろ、全然変わつてないのね。私は嬉しくもあつたけど……そのままじゃ、きつといつか、誰かを傷つけるわよ』

それはおととい坂田とともに千鶴を駅まで送つた際に、ひそりと囁かれた言葉だつた。

「私と同じように」と続けて聞こえたような気がしたのは、公博の錯覚だろう。千鶴は嫌みを言うような人間ではない。

それでもそんな気がしたのは、目に少し痛い笑顔を彼女が浮かべたからだ。

『だから、気をつけてね。元彼女サマからのありがたい忠告よ』差し向かうテーブルには、フルーツの詰め合わせがビニールに包まれたまま。林檎に問いかけても、疑念を掻き消してはくれない。

両親が一度に亡くなった二年前、橘公博には心に決めたことが三つあつた。

一つは、花穂を守ること。

そして二つ目は、

「和泉さん、すみませんが、もう会つのはこれっきりにしませんか」

恋を、しないこと。

「ど、どうして」

唐突に突き付けられた別れに、蘭の表情は戸惑いを隠せずに声をあらせる。

拍子にテーブルがカタン、と動かされた。

「私の、気持ち。気付いているんでしょう……？」

そしてもう一つは、蘭にも言えないこと。

「和泉さん。俺がどうしてカメラマンになつたのか、まだ話したことがなかつたですよ」

「え、ええ。そうね」



飛び火する展開に、蘭は緩む涙腺と自分の心をどうにか堪えて、公博の話に耳を傾ける。

ここで泣いてしまつては、彼とはもう会えない。そんな予感がするのだ。

「ある目的のためなんです。もちろん誰にも話したことはないし、誰にでも話せることじゃない。そのためには」

公博はここで一度口を閉ざした。

そして、無言のまま蘭を玄関まで引つ張っていく。きぬ擦れの音もしない。

「そのためには――私は要らない？」

大人しく連れ出された蘭が公博を見上げる形で問いかける。

「何でもするつもりなんです」と公博は力なく答える。

玄関の靴箱の上には、いつかの折り鶴。それを手に取ると、公博は蘭の掌に強く握らせながら言った。

「そのためには――貴女は邪魔なんです。だから、俺のことは忘れてください」

蘭がどうにか鶴を握り返した時、唇が押しつけられた。

長い、時が止まったかのようなキスだった。蘭が見開いたままの目で見た、最短距離の公博は、何故か泣いているように見えた。

いつしか平井も蘭も橘家から姿を消した時刻。空が黒のベールに包まれた頃。

薬を買いに出ようとする、公博と花穂の影が月明かりにアスファルトに伸びていた。

「花穂。もう大丈夫だからな」

「う、うん？」

元氣すぎる兄の様子に、違和感を覚えながらも花穂は拒むことなく頭を撫でられた。

「走って競争！ 賞品はプリンです」

「ええっ」

驚く花穂を後に、公博はもう数メートル先へと走り出していた。影は少しずつ伸びていく。

「ま、負けないもん」

と、花穂も走り出した時に、公博の口が動いた。それは二人の距離を考えれば、届かないはずの言葉だった。

「ごめんな、なんて言葉いらないよ。兄さん」

「ど、どうして分かったんだ」

立ち止まって、声をあげた花穂に、公博も足を止める。

「分かるよ、兄さんのことだもん」

「なんてねー」と今度は花穂が公博を走り出して、追い抜く。差は一気に広がっていく。

「お、おい！ ずるいぞ」

兄はまた走り出す。

笑い出す花穂。風邪はもうほとんどよくなったようだった。

「兄さんだけが、いればいいのに。どうして、一つじゃなかったのかな」

息が続かず、目印にしていた電柱のところで花穂は激しい呼吸を整えた。後から追い付いた公博は、「大丈夫か？」と背中をさするが、先に発した言葉に気付いた様子はなかった。

左側は用水路が流れていて、そこには色褪せた紫陽花が残り少ない命を咲かせていた。

消える時まで、儂く。



## 7枚目 妖精の歌

現世に生を受けた時。

人は自身が生きていく世界を選ぶことは出来ない。

ゆえに人は、天から何がしかの才を与えられている。

それは、彼女の場合も。

そうして少しずつ、太陽が顔を出している時間は長くなっていき、花開くたくさん向日葵たちが背くらべを始めた。やがて聞こえるは、蝉時雨。

夜には蝉と指揮を交代した、ひぐらしの鳴く声が夏の暑さを鎮めてくれる。

そんな七月の週末。

よりいっそうの涼風吹く夜。時刻は丑三つ時。橘家のベットの上には二つあるはずの影が一つしかなかった。

そもそもこの家は神奈川県に隣接した、東京のとある区の中に建っていた。

都会の多くの街が、華やかでありながら忙しく歩かねばならぬ土地であるのに、そこは穏やかに時が流れていく場所だった。それが彼女に影響しているかは定かでない。

だが、とにかくにも花穂は独り、暗闇に包まれた住宅地を歩いていたのである。

服装は半袖のTシャツに股上の浅いジーンズという、極めてラフなものだった。足元は踵の低いサンダルで、左のポケットからは小型音楽プレイヤーの白いコードが上に延び、途中胸のあたりで二手

に分かれて両耳に収まっている。

手ぶらではあったが、一歩つま先を進める度にチャリ、チャリと硬質な金属音が鳴り、周囲の闇に吸い込まれていった。もう一つのポケットに小銭か家の鍵が入っているのだろう。

花穂は前だけを見据えて、直線道路に沿って歩いていった。そしてその先に何があつて、何がないのかも全て知っていた。

雨風に震えて外壁の傷んだ古い家や、建て替えたばかりらしい洋風の一軒家。扉の形や屋根の色、窓の数などひとつひとつを見ても、形は同じであれど全く同じものはない。

いつからこんなことをするようになったのか、花穂は正確な月日を覚えていない。それぐらい、彼女にとっては昔のことだった。

短い旅の終着駅は、毎回場所が違っていた。目的がある様子ではないから当然だが、どうしてか時間帯だけは、日が沈んでからと決まっていた。

だからその行動の理由も、一つの条件の上でしか成り立たないだろう。そんな気分になるか、ならないか。気まぐれという単語一つ、「プリンでも、買いに行こうかな」

虫たちの群がる街灯の下まできたところで、左手に折れていく道の奥に、大手のコンビニエンスストアの明かりが花穂の目についた。そこから先は、まだ未踏の地であった。しかしそれでも迷わずに彼女は最初の一步を踏み出した。

店内は客どころか、店員の姿さえ見当たらなかった。そのせいだろうか。眩し過ぎるほどの明かりの下、空虚で淋しげな空気が辺りを占めている。

使う人のいない、でも無くしてしまうことも出来ない我が家の、両親の部屋に入った時のような感覚。それを花穂は胸の奥で感じ、振り切るように早足でデザートの棚へと向かう。

数種類のデザートが並ぶ棚から、お気に入りのメーカーのプリンを二個勢いよく掴むと、その足でレジに行き、声をかける。一刻も早く、この場所から抜け出したかったのだ。

「すみませーん」

「はい」

一呼吸の間をあけて、専用のエプロンをかけた男性店員が扉の向こうから出てきた。

「いらっしやいませー」

花穂に笑顔で応対した店員は、慣れた手つきで商品のバーコードを読み取り、金額を告げる。そしてそれを受け取ると、直ぐさま袋に入れ、お釣りといっしょに差し出した。

「ありがとうございます」

彼の俊敏な動きに釣られて、花穂は慌て袋を受け取ろうとして、右手に握ったままのお釣りがチャリーンと音を立ててこぼれた。

「す、すみません!」

間抜けな自分が恥ずかしくなり、花穂は急いでそれらを拾おうとしゃがみ込む。

「手伝いますよ」

だが、今度は手伝おうとした彼の手に触れてしまい、さっと引っ込める。

「す、すみません」

「いえ、大丈夫ですよ。俺もよくやりますから」

その時、花穂は自分の胸がとくん、と波打つのに気付いた。彼のはにかんだ笑顔は、公博のそれとよく似ていた。

「どうかしました?」

放心状態の花穂を、青年が覗き込む。すると、彼の少し茶色に染まった髪に隠れていた、耳のピアスが光った。

「だ、大丈夫です」

ようやく落ち着いたのか、すつくと立ち上がると「はい、どうぞ」と渡されたお釣りをポケットにしまう。青年の名札には大野とあつ

た。

「いちご、好きなの？」

「え。別に、そういうわけじゃ、ないんですけど……」

またも唐突な出来事に花穂は言い淀む。何の話かというと、黒地のＴシャツにプリントされていたのが、苺だったのだ。細身のデザインのため、花穂の身体のラインを惜しみなく拾って、ほどよい大きさに見え、とても甘そうだ。

「ちよつと待ってて」

花穂の返事を待たずに、大野はデザートの商品棚まで行くと、一つのケーキを持って戻ってきた。

「はい、これ。余っても仕方ないから――おまけね」

ケーキはやはり、苺のショートだった。

「で、でも」

花穂は未だ口をもごもごとさせる。こうした人の厚意に、慣れていなかったからだ。家族以外の人間に、優しくされることも。

「夜は危ないから、夕方とか明るい時間にまたおいで」

青年は、その瞳に公博と同じ優しい光をたたえて、もう一度笑った。

結局、花穂はケーキを拒否できずに店を出た。分かってしまったのだ。彼の、それをすれば自分が喜ぶであろうという、優しい気持ち。

それほど長くいたわけでもないのに、東の空は水色に染まり始めていた。

出掛ける前と違い、花穂の手にはコンビニの袋がぶらぶらと揺れている。

家を出た時とは明らかに異なる思いが、花穂の胸をいつも以上に強く締め付ける。

『どうして、分かったの』

花穂の場合、よいことがあると悪いことがあった時以上に、悲しい出来事を思い出す。過去の、つらい記憶。

ひぐらしはもう鳴いていない。囀るは、雀。朝が訪れる、始まりの歌声。

花穂は袋の中のデザートがぐちゃぐちゃになるにも構わず、夜明けまでの帰り道を走り出した。サンダルが煩く悲鳴を上げて、足を止めない。ただひたすら、駆けていく。

橘花穂には、兄の公博と同じく特殊な力があつた。

それは、人間にはおよそ聞こえないはずの声や音を聞くことのできるものだった。

だからこそ、彼女は人の痛みを共有できる優しい人間になった。

だが、現実には彼女にどこまでも残酷だった。花穂が中学生の時のことだ。

どんなに小さな悪口かいわさえも聞こえてしまう花穂に、一人の少女が言った。

『橘さんてさあ、気持ち悪くない？　なんであんなに地獄耳なわけ』

その少女は、クラスで中心となっていた人物だった。以来、級友たちは花穂を次第に空気のように扱い、彼女はこの世のどこにもいない存在となっていた。

彼女に残されたすべは、一つしかなかった。

口を閉ざし、耳を塞ぎ、瞼を閉じて、この世には綺麗なものなど何もないことを心に刻んでいくこと。

全てから隔絶された世界で、花穂はようやくその心を落ち着けられたのだ。それはけして、幸せではないけれど彼女はそれで充分だった。それなのに。

人である花穂は、無意識に光を求めた。暗闇の中で唯一自分を照らし出すもの。

それが、兄だった。



たどり着いた場所は、自宅近くの何の変哲もない小さな公園だった。錆び付いたブランコ、犬の糞が混じる砂場。トンネルとあちこちに取っ手のようなものがついた半球体の遊具。

花穂は荒い呼吸を整えもせず、一心不乱にその遊具を登っていく。だが手があいていないと曲線を描く斜面は登りづらく、自身のその手でコンビニの袋をゴミ箱へと投げた。それらはドン、と鈍い音と同時にゴミ箱の角に当たって地面に落ちた。

遊具の頂上は円形に窪んでいて、花穂はその縁に腰掛けるようにして、天を仰いだ。

西の空はまだ暗い夜のベールを纏っており、まさに夜明け前だった。しばらく花穂はその空を眺め、黒から青へ、そして水色と薄くなっていくさまを見ていた。

そして一度唇を引き結んでから、大きく息を吸った。

それは、日本語でも英語でもない歌だった。

どこまでも高みに舞い上がっていくような高音で、伸びやかに、蒼天までも揺らがすように響いていく。

メロディのないその曲は、以前花穂がどこかで聴いたことのあるものだった。聴いたのは一度だけ。

世界のどこかで未だ使われているというその言葉は、ラテン語。または始まりの言葉。

その歌は、きっと今日も明日も、向こう側の世界まで響いている。

## 8枚目 硝子の海を泳ぐ魚

かくして、それぞれの思惑と事情、目的が絡まりあって世界は動き出す。

それは運命か、結果か。  
後悔しないすべは一つ。

湿った空気が髪や肌に纏わり付き、黒雲が空を支配して自然と人々は自宅で一日を過ごす。

その日、日本列島には極めて稀な大型台風が接近していた。  
だから至極当然、飲食店への客足は遠のくはずなのだが、都内の某ファミリーストランは少しばかり違っていた。

入口から向かって右手の、道路に面した窓際の席。そこに彼の姿はあった。

「ご注文はいつものでよろしいですか」

「あ、いや。今日は烏龍茶で頼むよ」

「かしこまりました」

振り返ることがないと分かっている、彼仕様の笑顔で仕事をこなすウエイトレス。

彼は、若い女性店員にとって常連だった。頻繁ではないけれど、自分がシフトに入った日に限り彼は現れた。

初めて彼にオーダーを取った日。ガラス窓の向こうに悩ましがな表情が映って、吹き付ける雨の滴が涙に見えたのを、彼女は今も覚えてる。

その日の彼こと公博は、趣味用の小型カメラさえ持たずに、そこ

から見える景色を眺めていた。代わりに旅行用らしき小さなポストンバッグが一つ、脇に置いてあった。

「悪い、遅くなった」

「こつちこそ悪いな。休日」

「なんの、なんの」

待ち合わせていた相手は級友の坂田だった。乱れた茶色の髪が、室内では感じない暴れ狂う風の凄まじさを物語っている。

「すみませーん。アイスコーヒーとフルーツパフェひとつずつね」

坂田も荷物は少ないらしく、脇に抱えていたB5サイズの封筒だけで、胸ポケットからタバコを取り出し席に落ち着いた。銘柄はセブンスター。

「たーさん、灰皿くれや」

「ん」

「さんきゅ」

一回でライターは点火。タバコの先端から燦る炎がちらついて、煙が立ち上った。

坂田はすう、とフィルターからニコチンを吸い込むと長く息を吐いた。

「できたぜ。確認頼む。間違いがあつたらまずいからさ」

「ああ」

つい、と差し出された封筒を公博は手に取る。

「烏龍茶とアイスコーヒー、お待たせ致しました」

そこで先程のウェイトレスが注文の品を届けに来たが、二人はそれに目もくれない。ウェイトレスは二人の険しい表情に気付き、急いでその場を離れた。

「たーさんの案がよく出来てたから、俺としては楽だったよ」

無言のままの公博が封筒から取り出したのは、一枚の紙だった。

大きさはやはりB5サイズで片面印刷だった。

よって坂田からは、裏面の白色しか見えない。だが彼はそこに何が書かれているのか知っていた。

「大丈夫、よく出来てるよ。さんきゅな」

「気にするなつて。俺もなにかしたかったからさ」

そうしてしばらく押し問答のような会話が続いて、坂田の注文したフルーツパフェがテーブルに並んだ頃。

ようやく公博は、誰が耳にしても理解できる話題を口にしたのだつた。

「今日、お前んとこ泊まってもいいか」

「電話でいいって言っただろ。何回も聞くなよ」

「悪い、なんとなく」

公博はそれきり積極的に会話をしようとはせず、豪雨の中を傘一本で帰路につく人々を眺めていたのだった。

同じ日か定かでない、八月の週末。

表参道の裏通りと呼ぶに相応しい夜道を抜けていくと、銀色のシヤープな光を放つ看板が見えてくる。角度の急なコンクリートの階段は近代的な洋装を醸し出していて、慎重に上ったならば、硝子で形作られた幻想空間が広がっている。

美容室オツジ。その店内に、彼女の姿はあつた。

兄とは反対に珍しくやわらかい表情で、花穂は鏡中の自分と向かい合い、前髪のメッシュが印象的な女性美容師と談笑していた。

「麻那ちゃんは最近ご飯食べてる？」

「んー、今日はヨーグルト一個食べた。かな」

「ヨーグルトお腹にたまるからいいよね」

「ん、そうだね」

返事もままならない様子で女性美容師は、どこか見覚えのある眼差しで花穂の髪と格闘を続けていた。その華奢で白い腕は休むことなく、忙しい。

彼女は都築麻那<sup>つづきまな</sup>。花穂にとっては兄以外で気を許せる唯一の存在。

例外中の例外とも言える親友だった。

彼女を花穂独自の印象で表すならば、桃色の狼。この一言に尽きる。

知的に鋭利な線を描く眉と、すつと通った鼻筋。白黒はつきりとした物言いが、強さと野性的なオーラを放つ。

それに対し、頬と唇は薄い桜色で、ふくよかな胸と花穂と比較してもそう変わらない身長が真逆なかわいらしい印象を与えるのだ。

「今日はいつになく真剣だね」

「昇級試験みたいなものだからねー。あ、話できなくてごめんね」  
「いいよ、頑張つて」

今日は麻那の美容師としての試験日で、カラーをやることになっていた。花穂はそれまでに何度も彼女のカット練習に付き合っていたから、断る理由などどこにもなかった。

まず櫛で毛束を取り、ハケでムラなく染料を塗りつける。塗り終わると、銀紙を巻き付けてから下から上に向かって折りたたんでいく。その繰り返しだ。

麻那は胸元にレースをあしらった黒のポロシャツで作業をしていて、花穂は染料がつかないだろうかと気になってしばらく見つめていたが、そんなことは少しもなく静かに彼女の腕に頭を預けた。

麻那がせつせと作業を進めていくほどに、左耳の下で無造作に束ねていた黒髪が、後ろ髪引かれるように流れる。

しばらくして銀紙の飾りで宇宙人のような風貌になった花穂に、染料を馴染ませるため円盤型のパーマメント器具が当てられた。

その間、花穂は店長と思しきロン毛の男性美容師に

「君、継続してカットモデルやる気はないかい？」

等と口説かれもしたのだが、すかさず麻那が歩み寄り

「ふつつふ。だめですよー店長。花穂は私のですから」

と笑いながら強烈な平手を店長の背中にくらわせたりして、穏やかなひと時は過ぎていったのだった。

ちなみに麻那と店長は恋仲でもなんでもなく、親戚であった。麻

那はそのコネもあつて都会の美容室で勤務していたのだ。

店長、水嶋は麻那を見込んでのことであつたが、彼女に対して世間の風当たりは優しくはない。並々ならぬ努力が必要だ。

一段落して、明るいメツシユの髪型になつた花穂が

「ありがとうございます」

と小さくお辞儀をすると「お疲れ様でした」と麻那も水嶋もは仕事スマイルで微笑んだ。

その時だつた。

水嶋が預かつていた鞆を渡そうとした拍子、それは宙をふわりと舞つた。

その刹那、花穂はストロボ撮影の光を覚え、時間を切り取られたような居心地がした。

「今のつて……」

それは予感だつた。

恐る恐る床に落ちたそれを拾うと、目を見開いてしまふほどの驚きと、奇妙な安堵があつた。

「店長さん！ この、この人。ここによく来るんですか」

「え？ ああ、彼女ね。お客さまじゃないんだが、別の仕事をした時知り合つてね」

水嶋は花穂の勢いに圧倒されながらも、続ける。

「もしかして会いたいのかい」

花穂は首だけでコクコクと頷く。

麻那は状況が飲み込めずにぽかんとしていたが、親友の味方をしたいらしく同じように首だけで同意をした。

「えっと。兄さんの知り合いなんですけど、この前家に忘れ物をしていたんです。兄さんに渡せばすぐ済むんですけど、旅行に行つてしまつて。それもできなくて」

思い付く限りの嘘を、花穂は早口で話す。このままでいても何も変わらない。そんな決意の光が彼女の目に宿っていた。

水嶋はうーん、と腕組みをして唸っていたが何かを思い出したよ

うにぽんと手を打つと、こう切り出した。

「今から話すのは独り言だ。だから誰かに聞かれても仕方がない。うん、仕方がない」

その後、花穂と麻那の二人は店長に何度も頭を下げてから、美容室オツジを後にした。

夜風は髪を撫でるように優しく、緊張はあっても恐れはない。そう、花穂のスカートとがなびいていた。

同じ日ではないが、同時刻。

ちりんと夜風に鳴らされた、金魚の風鈴が年を重ねる度に早さを増して過ぎ去る、ひと夏を惜しんでいた。

昔ながらの渦巻く蚊取り線香の細く揺らめく白煙をたどって夜空を仰げば、夏の星座がまたたいることにも蘭は気付く。

しかし、今の彼女には輝きが眩しすぎて、逸らしたい。

未だ胸を強く締め付けている言葉も、耳の奥で反響してばかりいる。

パチン。パチン。パチン。

「あっ……」

規則的に動いていた右手が、ふとした拍子に止まる。膝を抱いた形で、足の爪を切っていたのだ。縁側なら、切った爪の行く末を心配する必要はない。

「また、やつちゃった」

だが盛大な溜め息が洩れ出たのは、落胆の顕れ。吸水性のよいハーフパンツから伸びているふとももが、艶かしい色で動き、再度空に目をやる。

異例の早さで師範の資格を取得し、空前絶後の業を日夜磨いてい

る、書道家和泉蘭。

そんな彼女にも、数少ない悩みがあった。

それが自身の爪を切りすぎてしまう癖であると、誰が想像できるだろう。

もう一度右の親指をつかむと、確かに右端の方の爪が指の奥にあった。伸びてくれば、指肉に刺さっていくことは間違いない。次第には膿がでて、皮膚を傷つけた証拠に血が流れてくるのだ。

「取らずに済むといいのだけど……無理かしらね」

左手が撫でた左足の親指の爪は、爪を縦に分割するような亀裂が走って割れていた。

病院で処置してもらったはいいが、伸び方がよくなく、生え際が不格好になってしまったのだろう。

彼女が普段着物であるのも、足袋で足を隠せることが本当の理由なのかもしれない。

「いけない、いけない。私らしくないわ。がんばれ、蘭」

かぶりをふって、一人ガッツポーズを取って気合いを入れ直してから、隣にある自室に引き返した。

和室の彼女の部屋は、調度品は少ないものの生活感がないのではなく、整理整頓の文字が当て嵌まるようだった。

奥まった位置には足の低い木製机があり、それに色みを合わせた革のクッションに、蘭は背中を預けた。

脇の巾着袋には外出時の必需品が納まっている。その中から、ビニールのカバーのついた渋い朱と紫のストライプの手帳を取り出し、開いた。

「楽しい予定はなかったかしらーっと。あったあった」

月始めからつつーっと人差し指が左から右へ真つすぐに滑っている。それはやがて中旬の木曜日でびたりと止まった。その日は半月。達筆な文字で、

「AM10美容室オツジ」

そう書かれていたのだった。



予期せぬ出会いを警告するかのように縁側の金魚の風鈴が、冷たい我が身をもう一度揺らして鳴いた。

## 9 枚目 シスター

変わらないものなんてない。  
移ろいゆくのがそう。

どんなものも。

いつかは、あるべき姿へ。

今夏何度目かの台風が過ぎ去った翌日は、晴天大晴。

雲一つない空模様は夏らしい陽気であったのに、頬や髪を撫でる風はどこか優しくて。

人知れず背中に秋の気配を感じる日。

美容室オッジの向かい側の通りにある小さな珈琲専門店で、花穂はじつと彼女を待っていた。苦くて飲めもしないであろうエスプレッソを初めて頼み、風味が消えた数時間後。

カップを空にすると同時に、件の女性の影がちらりとして慌て店を飛び出した。

「あの、すみません」

背後から呼ばれたであろう声に蘭は足を止め、振り返る。

声の主は少女だった。

髪色がいつかの記憶よりも明るいけれど、姿形には確かに見覚えがあつて。

「貴女は、もしかして」

履き慣れない黒のパンプスに自然と力が入る。すると

「あの。お話したいことが、あるんです。今お時間、ありますか」  
赤味を増す頬に知らないふりをするように、花穂は震える喉で用

件を告げた。

幾度となく反芻した練習そのままにならぬ声が、恥ずかしくもあり怖くもあったから。

けれどそれは、蘭も同じだった。胸中でいくつもの疑問符が渦を巻いては、泡になる。轟くは濁音。でも泡は次第にとけて水になるから。

今までそうしてきたように全て喉奥へと押し込んで、

「ええ、かまいませんよ。それでしたら、私の家へいらっしやいませんか」

と、別の誰かにも言った時と同じように微笑んだのだった。

蘭の自宅は表参道駅より二駅離れた場所にあった。

だから会話は時折に、蘭が行き先を指や方角で示すだけ。

電車で揺れる間も終着駅から少し歩くだけの時も、二人には重苦しく感じられた。そして駅が遠ざかるほどに鼓動は脈動し、激しさを増す。

「こちらです。どうぞ」

そうして、二人の足が止まり、並んだ。

見上げるのは昔ながらの日本家屋の造形を残した、一軒家。塀には書道塾の看板が立つ。

「自宅兼、仕事部屋です。今日はまだ時間ではありませんから、誰もいません」

門をくぐり、玄関を上がると長い廊下が続く。昼近い時分になっていた屋敷は静まり返っていて、蝉も鳴きはしない。

「今日は皆、外出しているんです。そうかしこまらずに」

言葉の通りに花穂は家人の誰とも遭遇しないまま、客間へと通された。

六畳ほどの和室。渋茶色のテーブルには艶が光る。

慎ましい姿勢で蘭は座布団を用意すると、花穂は彼女に倣うようにして正座した。

そして対峙。

「それで、お話とは何でしょうか」

「あ、いえ。その、」

花穂はようやく蘭と向き合うことが出来たが、自分が先に口火を切る予定でいたから口ごもってしまった。でも咳ばらいを一つして必死に脳内で繰り返した言葉をなぞるように紡ぐと、一通りの経緯を説明出来た。

友人の一人が美容室オツジに勤務していること。そして偶然に店長が落とした蘭の名刺を手にし、無理矢理に水嶋から今日の予約を聞き出し、今に至ること。

その間蘭は、貝のように押し黙っては頷いていた。

そして最後に「そうでしたか」と笑顔で言い締めた。

続きを急かすように、花穂の知らぬところで風鈴の透明な音色が二人の耳たぶを揺らす。

「それで本題なんですが」と花穂は一呼吸あけた。

眼差しは、研がれた刃物の如く、光。

「こんなことを私が聞くのはおかしいんですけど。

最近、兄さんと会っていますでしょうか」

蘭は驚いたように目を丸くして、首をすくめて微笑んでみせる。

答えを聞かなくとも分かる、肯定を示す笑み。

「どうして、そんなことを」

「ええと、その。説明するのは難しいんですけど、最近少し様子が変でして。

仕事以外で家を空けることはそうなかったんですが、このところ頻繁で。行き先も嘘ついたりして」

公博が坂田の家に外泊した日のことだろうか。それ以上の何かがあったのかもしれない。誰もが知らない所で嘘をつく。

「だから最初は、あなたと出掛けたと思っていたんです。でも様子

を見る限り、そうでもないみたいで」

「ええ、残念ながら」と、蘭は続けた。

この問題に関しては、思いを押し付けるばかりの選択肢は、自分が傷つくだけだと一羽の鶴が告げている。

だが相手の出方を窺うばかりの人間ではない彼女は、事実を隠したところでも、結果は獲られないと知っているから。

「これからもその心配はないと思いますよ」

「え」

「何もしないまま、ふられてしまいましたから」

淡々と、事実を明かしてしまえる。

高鳴るは心臓。降って湧いた告白に、花穂は身を硬くすることで受け止めようとするが、予測以上の事には対応出来ずにいて。

蘭は何を思っただか席を立て、障子戸を開け、縁側の硝子戸も開けて換気をした。清涼な風が部屋に流れていく。

「貴女みたいなかわいい妹さんがいたら、当然なのかもしれないわね。私には兄弟はいないから、分からないけれど」

雲間から差し込む太陽光を、背に浴びるように振り返る。

「でも、本当は興味が無いのかもしれないわね。楽しいことや美味しいものも、彼が本当に求めているものじゃないのだから。だとすると」

蘭はそこで次の言葉を模索するように、首を右肩へと預け、瞬く

「彼は本当に、興味が無いのね。囚われていながら。無限に広がる美しい世界を」

肯定も否定も言葉はなく、再度風鈴の硝子音が空響する。まるで一枚のコインが落ちたかのよう。

「なんて。やあね、私ったら。何を言ってるのかしらね」

静寂に押し潰される前に自嘲を込めて蘭がクスクス笑う。釣られて花穂も笑う。笑う。頭の裏側で反響する言葉を、振り払うため。

「あはは。もう嫌だなあ、これだからあなたみたいな人って」

「やっぱり、おかしかわよね」

「全然」

笑いを越えて、花穂は表情を失いながら徐々に前のめりにうなだれる。

蘭は戸惑いながらも近付き、その手を伸ばす。危うさ。

「分かってないふりして、分かってるじゃないですか。そう、だから兄さんはカメラマンになったんです。」

心を向こう側の世界に置き去りにして。ある目的のためだけに写真を撮ってる」

「貴女は、それが何なのか、知っているのね」

「ごくり、と蘭の喉が嚥下する。」

「分かっています。確かめたことは、ないけど。私には聞こえる。」

だから私は、兄さんの写真が嫌い。あれには心なんてどこにもない」  
沈黙が時を支配する。

二人の言葉はお互いの心にじわじわと染み渡り、あるいは溢れて零れる。

「私は、もう兄さんには写真を撮ってほしくない。でも、どうしたらいいのかわからない」

「花穂さん」

顔を上げた彼女の目には、涙が浮かんでいた。震える手の平、痛む喉。それを見て瞬時に蘭は理解した。

彼女は兄の想い人である自分を探りに来たのではない。

彼を引き止める言葉を捜しに来たのだ。縋るような思いで。

「私が直接言ったら、みー君はきっと傷つく。隠してるのが、その証拠。でも、何を言っても駄目な気がして」

泣くことさえ我慢してずっと悩んでいた少女の背中を、蘭はさすった。

ハンカチを差し出すと受け取り、握り締める。

「どうして、私は私なんだろう。どうして他人じゃないの」

さらに嗚咽した。ぽろぽろとこらえきれない思いが零れてなお自分を責めている。

他人ならば、かけられる言葉があつたかもしれない。そうであれば、見つけられたはず。

「どうしてでしょうね。それは私にも分からないわ。神様が決めたことだもの」

「蘭さんは、クリスチャンか何かですか」

「いいえ、特に信仰心があるわけじゃないわ」と、首を振る。だが背中を撫でる手は優しいまま。

「でも、これだけは分かるわ。彼はきつと傷ついても、貴女を嫌いになつたりしないわ。妹だからとか、そんな安易な理由じゃない。誰よりも他人に優しい貴女だもの」

その言葉で、花穂の世界に光が射した。脳天を揺さぶられるような目眩で、胸に刺さった棘が抜けた嬉しさでまた、涙が滲む。

「嫌われるのが、怖かったのよね」と蘭は我が子を慈しむような優しい瞳で笑う。

「兄さんが、ううん。みー君が蘭さんを好きになつたの分かる気がする」

こんな誰かを、待っていたのだ。もうずっと長い間。

「ふふ、そうかしら」と名前のくすぐったさにまた笑う。だが「違ふの。聞いて」と涙を甲で拭う花穂にもう陰はない。

「私たち、兄妹じゃないんです」

「血が繋がってない、とか」

声でなく、ただかぶりを振る花穂。いつそ、そうであれば、苦しくはなかった。

「私とみー君は、二卵性の双子です」

## 10 枚目 回帰／蝕

耳聡い少女の口から語られたのは、ある双子の誕生から家族になるまでの悲しい物語。

それは種。

そして、彼らのルーツ。

たまごが先か、鶏が先か。

世界の始まりの答えは知らない。だが、人の始まりには一組の男女がいた。

男の名は橘一成。

女の名は石川喜美枝。きみえ

家が近所で生まれた時から一緒だった二人は、幼なじみの関係からいつしか特別な感情が芽生え、愛を育むこととなった。

結婚という過程を経て夫婦となり、子供を授かる事もそう早いことでも、遅い出来事でもなかった。

季節は秋。枯れ葉が舞落ち、小枝を揺らす頃。

喜美枝は洗濯物を畳んでいる最中、ふと身体に違和感のようなものを感じて見てもらったところ「ご懐妊ですね。おめでとうございます」と祝福の言葉を医師から貰ったのだ。

有限な言葉では伝え切れない喜びを、喜美枝は夫に何と伝えたのだろう。細部までは誰の知るべきところではないが、天使は確かに舞い降りた。

だがつかの間の幸せとはよく言ったもので、定期検診で喜美枝に告げられたのは、卵が二つあるという事実だった。



「赤ちゃん、双子みたいなの」

「そうか」

「たぶん、帝王切開になるわ。危険だからって」

「そうか」

幸福と不安が胸中でないまぜになって、喜美枝はただ事実を事実のまま伝える他なかった。

だが一成は、予感があつたのか何でもないことのように笑顔で、妻の髪を優しく撫でた。

「大丈夫。大丈夫だよ」

根拠も何もない、気休めとも取れる言の葉。だが喜美枝の不安を取り除くには充分だった。

他の誰でもない夫が発した言葉の重さが違うのは、父親となる男の力であると解ったから。

そうして秋が終わり、冬が来て出産を間近に控えた。

一成はこの頃、写真家として表舞台での成功を収めた。それまでは一介の商社マンでしかなかった。

きっかけとなったのは愛しい妻のふと呟いた一言。「あなたも何か楽しいことを見つけられたらいいのに」だった。

そして迎える春に雪はとけた。数分の差で生まれた二人は同じ年で、でも誕生日が一日違いの姉弟だった。

何事もなく出産出来たのは、ひとえに何らかの加護を賜っていたのだろうか。

それもまたつかの間の安心に外ならなかったことを、夫婦は十年数後に知る。

女の子が小学校を卒業する頃になっても成長しなかったのだ。身長は入学当時から十数センチ伸びただけ。下級生に間違えられることは多々あり、歯は全て乳歯だった。この頃男女間で話題にのぼる二次成長もみられなかった。

原因は分からなかった。よって、先天性の成長障害ではないかも医師には診断された。

その春。

男の子は中学へ入学した。女の子は母親とともに外国で一年間の病院生活を開始した。一縷の望みを賭けて。

そして一年後の春。

女の子は一年遅れて、同じ学校へ入学を果たした。

そうして双子の関係は同じ年の姉弟から、一つ違いの兄妹へと変わっていった。

そう振る舞わなければ、相手に他意はなくても好奇の眼差しを浴びることになる。傷つくのは自分一人でもいい。家族の誰もがそんな犠牲の念を笑顔の下に隠して、日々は流れていった。

やがて世間体を盾に作り上げた兄と妹あるいは家族を演じることが当たり前になっていき、偽りでも安らぎさえ感じるようになっていった。

幸福を掴めると信じていた。否、これこそが幸福であると信じ長く続くことを願っていた。

その矢先だった。二人の両親の生が理不尽にも奪われたのは。舞い降りたのは一体何であったのか。

家族写真は破れて双子は二人きりの家族になった。

そこに終わりはなく、今があるだけであった。

現世に音はなかった。

とつとつと糸を紡ぐように語っていた花穂も、子守唄を聞く子供のように傾聴していた蘭も、微動だにしなかった。あるいは出来なかったのか。

閉幕の合図は風鈴の音だった。透過した高音が静寂を打ち、二人は同時に自身の空腹に気付いた。続いてそれを主張するように、何かを搾り出す音がぐぐうと鳴った。

「あ、あら。もうこんな時間だったのね」

蘭が恥ずかしげに左手首の腕時計を見ると、午後一時を回っていた。

「お昼過ぎてたんですね。お腹もすきますよね」

「話に夢中で全然気付かなかったわね」

「いえ、こちらこそ長ったらしく話してすみません」

恥ずかしさで赤面しつつ笑いを堪える二人の顔は、晴れやかな笑顔。

しばらく失笑し合って、おもむろに蘭が席を立った。

「私でよかったら何か作りましょうか。スパゲッティは好きかしら」

「あ、はい。嫌いじゃないです。わざわざありがとうございます」

続いて花穂もその場を後にした。「手伝います」と蘭の背中を追いかけるさまは彼という時と変わらない無邪気さで。

そう気付けば何事もそのままではいられない。

その夜、数十年に一度の月蝕が起こった。右端からゆっくり時間をかけて欠けていく月を、自室の窓から眺めていた彼女は決断する。半身を失うかもしれない我が身を思い、重ねて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8869b/>

---

ファインダーの向こう側

2010年10月11日02時46分発行